

世界がつながる親切なお金

海外・シンガポールアメリカンスクール 8年 小宮 聴善

日本から5,500キロ離れた赤道直下の小さな国にある、世界55カ国から生徒が集まっている学校で、日本人はクラスで自分たった一人。3年前から父の仕事の関係で住んでいるシンガポールの、インターナショナルスクールに通っている。

普段のクラスメートとの会話の中で、日本が話題になることは無い。でもこの日、3月14日の月曜日は違った。クラスメートも先生も、「日本で大変なことが起きたとニュースで見たけれども大丈夫？」と心配してくれた。僕は、幸い自分の家族や親戚は無事だったことと、けれども東北地方では地震と津波で未曾有の大災害が起きたことを話した。

学校の先生方や生徒の父母は、遠く離れた異国の被害者の方々に対して何が出来るかを、真剣に考えてくれていた。翌火曜日の3月15日には、全校生徒と父母は、校長先生からのお知らせを頂いた。日本の災害被害者の方々へのお悔やみの言葉と、少しでもお役に立てるようにと、全校を挙げての震災復興支援募金の活動開始と協力依頼だった。結果、目標の8万シンガポールドルに対して、12万5,000シンガポールドル(日本円で約800万円)が集まり、日本大使館に送られた。クラスメートも、日本支援というTシャツを作るなど、思い思いの方法で、被災者の方々への気持ちを伝えてくれた。

街の光景も一変した。あらゆる地下鉄の駅には、3メートル四方の看板で、シンガポール赤十字が日本への募金を呼びかけてくれた。国中でチャリティー活動が始まり、コンビニエンスストアやスーパーのレジの横などの様々な所に募金箱を目にするようになり、震災復興支援グッズを売る店も多数出来た。テレビでは、震災翌日には既に、シンガポールの災害救援部隊と救助犬が被災地に派遣されたと報じていた。日本の国外で、これほど多くの日の丸やジャパンという文字を見たのは、生まれて初めてだった。

たくさんの支援活動を目にし、そして報道される津波の被害が時間と共に拡大

するにつれ、日本人である自分は、募金や日本への支援の呼びかけの他に何かすべきではないかとの思いが日々強くなっていった。しかし、どのボランティア活動も18歳以上となっていた。それでも10カ所以上の団体に電話をして、自分も何とかお役に立ちたいとお願いした。1カ所から、親も同伴ならばと、特別に参加許可を頂けた。

夏休みの帰省中に、満席の夜行バスで母と向かった先は、宮城県石巻市の^{なかさと}中里という場所だった。海岸から2キロ近くも内陸の場所なのに、家々の壁には、^{ひざ}膝の高さ程の茶色い浸水の跡があった。津波が川を逆流してやってきたとのことだった。僕の担当した作業は、下水道の溝を掃除することだった。コンクリートの^{ふた}蓋をはずし、底に溜まった^かヘドロを掻き出し、^{どのう}土嚢に詰めて、集積所まで運ぶという作業だ。コンクリートの蓋は10キロ以上もあるので、住民の方々がご自分達で掃除することは難しい。ヘドロを掻き出すことで、異臭と害虫が少しでも減ればと願った。お住まいの年配の女性にかけて頂いた「ありがとうね。本当にありがとうね」という言葉は、一生忘れないと思う。それどころか、ペットボトルの飲み物まで^{ちょうだい}頂戴してしまった。被災者の方に飲み物を頂くとは思ってもよらず、何度も遠慮したものの、何度も勧められ、母に相談して有り難く頂戴した。頂いたスポーツドリンクは、これまで飲んだ中で一番おいしく優しい味がした。

今回の震災で被害に^あ遭われた方々の苦しみや悲しみは、僕の想像を絶するものだったに違いない。それほど苦難は決して、お金で癒されるようなものではないとも思う。反面、津波により住まいを失った方などがもう一度生活を取り戻されるには、やはりお金も必要だと思う。募金というものは、そのために少しでも足しにして頂きたいという、大勢の人達からの思いの象徴なのだろうと思う。もちろん、金額は全く足りないだろうけれど。

これまでも、ODAの形で日本が世界中に貢献しているということは父から聞いていた。今回、世界中から来ているクラスメートからの募金や、シンガポールの国を挙げての支援活動を見て、世界中からも日本は暖かい気持ちを頂いたことを身近に感じた。お金を通じて、日本と世界中は確かに、相互につながっていることを実感した。

将来、僕は世界に関わる仕事をしたいと思っている。その時、国籍や人種の分け隔て無く、平等に接することが出来る大人になりたい。そして、今回の体験でクラス

メートや被災者の方々から頂戴した優しい気持ちを今度は自分が持ち、世界中の人達に接することが出来るようになりたい。

